
うわべだけの世界

朱人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

うわべだけの世界

【Nコード】

N5280D

【作者名】

朱人

【あらすじ】

高校背の主人公は、かつて天使と契約した、選ばれしものだった。ところがそのために、彼は周囲からいじめられることとなった。あるとき学校に転校生がやってくる。彼と転校生の関係とは？

現実の皮がむけるのを、私はずっと待っていた。この世界は、実はもう一つある真実の世界の、いわば表象であって、いずれそのときがやってくると、あたかも果物の皮がめくれるように、真実の世界が現れるのだと、私は天使を名乗る一人の少女から聞いた。そして、天使がそのことを教えているのは私だけで、私だけが真実の世界と向き合ったとき耐えることができ、従って私だけが選ばれたものなのだ。

私は現在高校生をやっているが、本当は悪魔がこの世界を浸食しないようにするために天使たちによって作られた特殊な人間なのだ。高校の前にある坂道は、歩いて上るととてもきつい、しかしこれももうわべだけの感覚に過ぎない。本当は、私の行為の一挙手一投足が、悪魔との戦いに関係があるのだ。どのように関係しているのかは私にも分からない。ただ、インドで蝶が羽ばたけば、ヨーロッパで雨が降るがごとく、私が歩けば、それだけで悪魔の勢力はこの世界から駆逐されるのだ。

私の歩いてくる姿を見て、前方を固まって歩いていた女子の群れが奇妙な視線と笑い声を上げた。……女子高生という生き物の感覚を馬鹿にしてはならない。彼女らは、私の正体について、その女性的な本能によって何かを察知しているのだ。だからああして、私に対して過剰に反応するのである。

はあ、はあと私は激しく息をつきながらようやく坂を上り終え、高校の下駄箱にたどり着いた。

下駄箱の中にある上履きを取り出してみると、中に水風船が入っていた。最近うち続いている、悪魔勢力からの攻撃に違いない、と私はすぐに気がついた。私が生きて生活するだけで悪魔どもには苦痛なのだから、その生活活動を止めようとして彼らは恐るべき策略を張り巡らせている。私が気がつかずに上履きを履いて、水の詰め

込まれた風船を割ってしまったて泣きべそをかくとでも思っているのか、甘いな。私は、その罨をタイル張りの床に投げ捨てると、上履きをすのこの上に置き、履いた。

「アイーッ」

ちくりと、左足の親指に激痛が走った。私はあわてて上履きを脱ぎ捨てると、手に持ってその中をのぞき、痛みを与えたものの正体を見ようとした。つま先の奥の方に、セロテープで丁寧に画鋲が貼り付けてあった。

白いハイソックスに親指から流れ出した血が丸いシミになっている。血！

「ヒッ、血が、血がー！」

私は柄にもなく取り乱してしまった。

見たことがない女子が一人廊下に立って、こちらを見ていた。笑っているのか、同情しているのか、暗くてその表情はよくわからない。彼女は私の視線に気がつくのと、階段に向かって走り去った。

私の教室は二年三組、この校舎の二階にある。私は階段を、ぜいぜいいいながら上る。最近この学校周辺では、悪魔が勢力を伸ばしているらしく、私が少し体を動かしただけで疲れてしまう。だんじて運動不足と、お菓子の食べすぎによる体重増加のせいではない。なぜなら、運動不足も体重増加も所詮見せ掛けのことに過ぎないからだ。あるのは、魂の統覚だけだ、そうかつて天使を名乗る少女が言っていた。

私が教室に入ると、いまやほとんどが悪魔にのつとられた哀れな男子たちが薄笑いを浮かべた。彼らは、今日も私の活動を停止させるべく、すなわち、私を自殺に追い込むべく姦計を張り巡らせているに違いないが、それも表象レヴェルの攻撃にとどまり、真実の世界にある私の魂に直接攻撃を加えてくるわけではない。表象をおとして私の魂はいささかのダメージを受けるが、しかしそれも、この世界が偽物だと気がついて私にとってはいした打撃ではない。

そんなことを考えながら自分の机に向かっていると、突然直方体が私めがけて飛んできて、よけるまもなく顔面に直撃した。激痛とあわせて飛び散る白い粉。私は床に落ちたその物体を見る。黒板消しだった。教室の奥のほうにたむろしている不良連中が、私めがけてそれを投げつけたのだ。

「害虫は、農薬で消毒しないと！」

そう、不良の中のリーダーが叫んだ。どうやら、チョークの粉を農薬に見立てたらしい。私は薄笑いを浮かべて黒板消しを拾い、元の場所に戻すと、チョークの粉を払い落とし、自分の座席に向かった。

私の机の上には、毎日毎日落書きが少しずつ増えている。「キモイ」「臭い」「学校に来るんじゃない」「死ね」、毎度毎度、似たような文句ばかりが書き連ねてある。どうせ表象の世界なのだから、もつと面白いことが書かれてあってもいいはずなのに。たとえば、「お前は割れた夕日だ」とか「晴れのガラス」とか「オムソイ」とか、そういうことを書いてくれたほうが、少しは私の魂に波風を立てることができただがそうはしないらしい。私の机の上に水滴がいくつか垂れた。どこから落ちてきたのだろう、まあ、これも表象の世界なのだから、突然どこかから水が垂れてくることぐらいあるのだろう。私は椅子に座ると、目をつぶった。

まもなく、ホームルームの時間が始まった。髪の毛を一・九に分けた落ち武者のような先生が教室に入ってきた。いつもどおりの朝のはずが……その先生の後ろから、ニコニコと笑ってひとりの少女が姿を現した。それは、私が下駄箱で取り乱しているのを見た、あの少女だった。

「さあ、今日はさ、えー、みんな静かにして。転入生が来たからさほら、騒ぐなって。これから自己紹介だけしてもらおうから」

先生が教卓から退き、その場所に代わりにその少女が立った。

「こんにちは、市にある、高校からこちらに転入することになった、です。よろしくお願いいたします」

いかにも明るくって、私とは対極にある、クラスの人気者の女子
って感じた。畜生、私の心の中に、何か炎のような揺らめきが芽生
えた。

彼女の周りには、すぐにたくさんの人ばかりができた。いわば私
の机が高気圧だとすると、あいつの机は低気圧だ。よく人を吸い込
む。

「前の学校はどんなところだったの？」

「趣味は？」

「好きな芸能人は？」

「どんなテレビを見るの？」

女子も男子も、かわるがわる質問する。くだらない。転校生

はそれに、時々戸惑いながらも実に丁寧に答えていく。ちよっぴり
シャイな、しかし明るく元気で人好きのする……ってやつだ。くだ
らない、何もかもくだらない、いいか、この現実の有様は、現実の
世界の表象なんだ、やつらの会話もうわべだけ、どうせ真実の友達
も恋人も、あそこに群れるやつには見つけられない、でも、私はも
うそれを見つけている、私に真実を教えてくれた、天使を名乗るあ
の少女。

一時間目、世界史の授業が終わった後、事態は急変した。　　が

私に話しかけてきたのだ。　　どういうつもりだ、これも悪魔の罠か、
それとも。

「君。いつも一人だけど、大丈夫？」

彼女は柔らかな笑みを浮かべてそういった。

「……」

私は何も答えなかった。そう、たいていの場合、返事を返さなけ
ればそれだけで、相手は私に話しかけてこなくなる。私は、真実を
知ってしまった人間だ。他人とは付き合えないのだ。

「いつも一人で何をやってるの？　考え事？　哲学が趣味なのかな」

ところが彼女は話しかけるのをやめない。クラス中の、悪魔の密偵たちの視線がこちらに集まる、彼らはこう思っているのかもしれない、彼女こそ天使たちの援軍だと。しかし、それはありえない、天使との約束で、私は現実の皮が向けるまで一人で戦い続けなければならぬのだ、援軍がくるはずがない。現れるとすれば、天使その人だったが、彼女は違う。違うはずだ。

授業のチャイムが鳴り、それと同時に英語の教師が入ってきた。「じゃあ、またいつか話しましょう」

彼女はそういつて自分の席に戻っていった。私はいつも、悪魔と呼ばれる巨大な勢力がこの世界を支配してしまわないよう、戦いに集中しているのだ。それを邪魔しないでほしい。彼女はたぶん、私をいじめられっ子だと思つて、それで同情して話しかけてきたのだろうが、あいにく私はそんなものじゃない。私は戦士だ。

今日も悪魔たちの攻撃を何とかしのぎ切つて、家に帰つた。

家族は誰もいない。うちの両親は二人とも、非正規社員というやつだ。何年も何年も下っ端の仕事を奴隷のようにやらされている。しかしそれも、私という選ばれたものを生んでしまつたがための受難だ。選ばれたもの一族には試練が与えられる、それが神話の時代以来続く掟だ、そんな神話が本当はひとつもなくなつて、それはそれらが表象の世界の神話だからだ。現実の世界の神話は、そのようなのだ。

私は自分の部屋にこもると、パソコンを起動させ、いつもの用にワープロソフトを起動させた。私はこのワープロソフトを使って、天使と交信できるのだ。

「今日も、相変わらず悪魔に操られた者どもの攻撃が激しかった。上履きの中に画鋲が入れてあつたり、机の上には私の悪口が書いてあつたり、体育の授業の跡で教科書がごっそりと隠してあつてそれを探すのに授業が終わつてから二時間も学校に残つたり、正直言つて悪魔の使いたちの攻撃はエスカレートする一方だ。どうしたらいい

いと思う」

私はそうワープロに入力した。

「そうね。悪魔たちは最近力を強めている。私も、真実の世界からあなたを助ける手を差し伸べているのだけれども、それも最近ではほとんど効力を持たない。でも、耐えて。あなたはこの地上に唯一残された希望なの。あなたが負けてしまったら、真実の世界は滅んで、偽物の、私たちが表象の世界と呼んでいるものだけが残ってしまう。だからがんばって耐えて」

すぐに、ウィンドウ上に返事が返ってきた。よかった、今日もあの天使を名乗る少女は健在だ。

「そうだな。すべては表象世界で起こっているに過ぎないものな。やつらは、真実の世界にある俺の魂にはなんらのダメージも与えることができない。ただ、表面を引っかくだけだ」

私はそう入力する。

「そう、私はいつでもあなたのことを見守っている。今のところまだ、姿を現すことはできないけれど、ね」

私は天使からの返事を確認した後で、パソコンを終了させ、ずっと敷きっぱなしになっている自分の布団にもぐった。

少女の幻影が、私の元に舞い降りた。私は彼女とキスをした。その後、空想の中でできうる限りの行為をした。

次の日、学校に登校した。一時間目は体育の授業、そしてそのあと現代国語の授業だ。昨日隠された教科書の中で、現代国語のものだけがまだ見つかっていなかった。どうしようか、教科書なしで、授業をすこすわけにもいかない。

私はいつもどおり、悪魔たちの攻撃をこらむった後、自分の席についた。「短小の君」「の体腐ってる。体洗い」という落書きが新たに加わっていた。まったく、昨日までのものより多少は面白くなっているかな。私の魂にさざなみが立つのがわかった。涙と鼻汁が机の上に垂れた。

教科書の問題を解決する方法が思い浮かんだ。体育の時間、みんなが出払っている間に誰かのを取ってしまえばいいんだ。何、ばれやしないさ。しかし、誰のを取ろうか、そうだ、昨日私の孤独を妨害した、あのむかつく転入生のものを取ってやろう。どうせ、教科書を取られたことなんて一度もないだろうから、これを機会に洗礼を与えてやろう。普段悪魔と戦っている私だ、これくらいのこと許されるだろ。

朝のホームルームが終わった後、みなジャージに着替えて、校庭に向かう。私はそのそと着替え、クラスから少し離れたトイレに向かう。そして大便をする個室にこもってしばらく待ち、教室に引き返した。教室には、予想通り誰もいなかった。

私は、教室の廊下側に面した転校生の机の中をあさる。前の学校からの遣いまわしで少し汚れた現代国語の教科書が出てきた。と名前が書いてある。よし。

私は　の教科書を自分の机の引き出しの中に、何食わぬ顔でしまった。背中に、何か超越者の視線を感じながら。

体育はバスケットボールの授業だった。私の存在を無視して授業は進んでゆく。たぶん、悪魔の使者たちはお互いにテレパシーで交信し合って、それでゲームを進行しているのだ。それができない私は、のけ者にされる。そうすることで私の苦痛を与えようというのだが、いつものことだ。私には何のダメージにもならない。

しかし、体育の授業の間中、私は　の顔をまともに見ることができなかった。なぜだ、私は選ばれたものだ、後ろめたく思ふ必要などないのに。

体育の授業は終わり、いよいよ現代国語の時間が迫っている。私は平静を装って教科書を机の上に出した。　のほうを見ると、机の中をかき回すようにして、教科書を探している。見つかるはずがない。私はほくそ笑んだ。

チャイムと同時に白髪頭の教師が入ってくる。 は彼に向かつて手を上げた。

「先生、すいません。私、教科書忘れてしまったみたいなんですけど」

「そうですね。それではしょうがありませんね。今日だけ、隣の人に見せてもらいなさい」

白髪頭は彼女に少し微笑んで言った。私が教科書を忘れたときには、もっときつい表情をして見せたのに、なぜだ……？おそらく白髪頭も、もはや悪魔側に取り込まれているのだろう、こうして私とほかの生徒を差別して、私を死に追いやるつもりなのだ。畜生。

だが、 の顔を見ると、なぜだかひどく動揺しているようだった。

私の心の中に、ずきりととげが刺さった。そしてそのとげは木のように枝分かれして私の心に食い込み、次第に痛みが増していった。このままではそのとげの成長が、私の心を破壊してしまうかもしれない。

そうなのだ、私はこの世界に唯一残された希望だ。その私が、他人の教科書を盗むという振る舞いをさせられたこと自体が、悪魔の巧妙な罠だったのだ。こうして、後ろめたさという成長する種子を植え付け、私の心を壊してしまうつもりなのだ。

そうなる前に、彼女には謝ったほうがいい。しかし、悪魔の手先が見ている中で彼女に謝ると、また巧妙な罠にかけられるかもしれない。それよりは、誰もいないところで謝ったほうがよい。しかし、彼女だけが一人になる事態、というのは考えづらい。ならば、謝るのは心の中だけにして、こっそり教科書を彼女の机の中に入れておこう。放課後がいい。

その後の授業を私はほとんど聞かなかった。

やがて、ホームルームが終わり、放課後になった。誰もいなくなるのを教室で一人で待っているのは怪しまれる。前と同じ作戦で、しばらくトイレに閉じこもっていよう。

トイレの個室の中で、私はまるで何かの宗教のように壁に頭をぶつけて 謝った。「ごめんなさい、あなたは今日、教科書を忘れたのではありません。私が教科書を取ったのです。ごめんなさい、あなたは今日、教科書を忘れたのではありません。私が教科書を取ったのです。ごめんなさい……」

それを百回ほど繰り返している間に、校舎内の人の気配はほとんど消えた。私はこそそと教室に戻る。案の定誰もいない。私は自分のかばんの中から教科書を出すと、 の机の引き出しにしまおうとした。

その時、がらりと教室の扉が開いた。

私は驚いて腰を抜かしてしまった。入ってきたのは だった。

「君、あなた、私の机で何やってるの？ その手に持っている教科書は何？」

彼女は私のほうにどんどん近づいてくる。

「それ、私の教科書じゃない？ あなたが盗んだのね！」

私は腰を抜かして、床にへたり込んだままだ。

柔和だった転校生の表情が、鬼のような形相に変化した。

「畜生、よりによってなんであなたに教科書隠されなきゃいけないのよ！」

私の顎に、強力なけりが飛んできた。

「あんなだけは。あんたがいる限りは、私はいじめの標的にされることはないって安心してたのに。何であんたが私の教科書を隠したのよ」

彼女は少し誤解しているようだ。私は胸倉をつかまれた。

バキ、私の頬に鈍い衝撃が伝わる。

バキ、バキ、バキ、 は私の顔を次々に殴った。

「や、やめろ、やめてくれよー」

私は必死に叫ぶが、彼女はやめる気配がない。

私の口の中は切れ、血の味がする。鼻からも液体が垂れた。たぶん鼻血だ。視野が赤くなる。それでも彼女は私を殴るのをやめない。

「どの学校に転校しても、どんなに自分を作って周りと接しても、いじめの標的にされるのは常に私だった。なぜ、なぜなのよ。あなたが教科書を隠したのがきっかけで、また私がいじめの標的にされるのよ。畜生、畜生！！」

彼女は私を床に突き飛ばした。

「教科書だつて完璧にそろえて持ってきてたんだから、忘れるはずがないわよ！ だから誰かが隠したんだって、すぐわかったわ。こうして放課後、残ってれば犯人の顔を見れるかもしれないと思ってきてみたら、まさかあんただったなんてね！」

彼女は私にけりの連発をお見舞いした。私はただダンゴ虫のように丸まって、それをやり過ぎすしかなかった。

「あんたみたいにひ弱なやつで助かったわよ。不良グループのやつが隠してたんだったら、私なすすべなかったもん。畜生、あんた、これからどうしてくれるのよ！」

なるほど、初めて学校に現れたときの彼女の柔和さは作られたものだったわけだ。そうして凶暴な自分を隠せばいじめられないと思ってるんだな。

そうして私に暴力を振るった後、彼女は教室内から立ち去って行った。

私は血みどろになって家に帰り、今日あったことをパソコンのワープロソフトに入力することによって天使に報告した。

「今日は、転校生に殴られた。最初は私に親切にしてくれるフリをしていたが、その実凶暴なやつだった。あいつと会話しなくてよかった。危うく私の心が揺り動かされそうだった。あいつも悪魔の使いに違いない」

「違うわ、あれは私。悪魔に寄生された私の姿よ。私もあして、ずっと何年間も人間界で過ごしてきた。あなたと一緒に、世界の真理を知っているから、いじめられていたわ。人間界の私は、自分が

天使であることに気がついていなかった。だけど、あなたと出会った瞬間、自分が天使だったことに気がついたの。ただ、天使が肉体を得るということは、悪魔に魂を売るといふことと同義だわ。だから、ああしてあなたにアンビバレントな態度を取ったの」

私はそのセリフに驚いたが、しかし心のどこかで予想していたことでもあった。

「成程、そうだったのか。なら、教科書を盗んだりして悪かったね」「いいの。あれは私の中の悪魔が仕組んだ巧妙な罠だから。私は私の中の悪魔を制御することができない。あの学校に私が姿を現したのは、現実の皮がめくれる時が迫っているから。この表象の世界の最後のときをあなたと一緒に過ごしたかったの。でも、もうそれも無理ね。明日から私、あの学校にはきません」

私は、かつて天使と出会った日のことを思い出していた。彼女との約束を守ってきたかいがあった。私が今まで耐えてきた日々も、これで報われる。

しかし、翌朝　　は学校に姿を現した。なぜだ、私はしばらくの間、愕然となったが、やがていつものように自分の席に着いた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280d/>

うわべだけの世界

2008年11月7日08時15分発行